

# ミニマリズムと ローラ・ディーンの舞踊

唐津絵理

## 1. 研究目的及び方法

本研究は1970年代のアメリカ現代舞踊の代表的役割を果たしたローラ・ディーンの記事や批評、作品分析を基にディーンの舞踊を考察することにより、ディーンとミニマリズムの関連を明らかにすることを目的としたものである。

## 2. 結果及び考察

### 1) ディーンの舞踊芸術論

ディーンの関心は人間の個性と、個人のもつエネルギーにある。彼女はダンサーが自分の個性を前面に押し出すことでエネルギーを継続させることができると考え、そのための手段として繰り返しを利用した。また「音楽と動きはひとつのものである」\*1と述べ、音楽は舞踊に不可欠のものと考えた。彼女にとって舞踊は音楽と同じように人間本来の原始的なリズムに関わるものである。

### 2) 「ティンパニ」のVTR作品分析

#### (1) 対象作品の概要

初演年 — 1980年 上演年 — 1981年  
場所 — the Brooklyn Academy of music  
出演者：ダンス — F：4，M：2  
音楽 — piano 2， tympani 1  
衣装 — 長袖の薄いブルーのシルクシャツ  
赤のパジャマのズボン

#### (2) 作品構成

##### 1. 音楽構成

- ①メロディー：全体は749，1～8小節をひとつの単位とする繰り返しで構成。
- ②テンポ：110から開始，132，152と最後のスローモーションまで速くなり続ける。
- ③リズム：ピアノのリズムは4回，ティンパニーでは8回変化し，7/4，6/4時にシンコペーションを引き起こす。

##### 2. 舞踊の構造的解析

- ①空間構成：幾何学的なフロアー・パターン  
「ティンパニ」空間構成

回数	8回	5回	4回	2回	2回
時間	05'36"	02'37"	00'50"	00'52"	00'52"

- ②動き：足のステップが中心で上半身の動きはあまり見られない。バレエ・テクニク，スピンスローモーション等の限定された動きを利用。
- ③時間構成：全体の24分28秒のうち，約13分が一定パターンの移行により作品が継続。

以上のディーン作品分析より抽出した特徴は  
(1)単純で限定された動きの利用 (2)パターンの利用 (3)エネルギー量の均一化による構成の平坦化 (4)舞台装飾の簡素化，と表すことができる。

### 3) ミニマリズムとディーン舞踊の比較

前回までの研究より考察されたミニマリズムの定義は以下のようであった。

「純粋に芸術的なもの本来の芸術個々の姿を追求しようとした。そのために意味のある不必要な要素は最大限に切り捨て、そのあとに残るものだけを強調しようとした。芸術的な内容が最小限であるために作品は中立的、単純で一定単位の繰り返し利用が多い等の様式上の特徴を擁す。見るためにのみ自律的に存在することを目指した。」

主な特徴としては (1)素材の単純化 (2)構成の平坦化 (3)舞台装飾の簡素化，が挙げられた。\*2

以上のこれまでの考察とディーン作品の特徴の比較を行った結果以下ようになった。

#### (1) 合致点

単純な動きの繰り返し，幾何学的な配置の空間構成，時間構成は最初から最後まで一定の繰り返しでクライマックスに欠く，という特徴はミニマリズムの特徴に一致する。

#### (2) 相違点

ディーンは純粋に芸術的なものを追求するために単純な動き等を利用したのではなく、個人の個性を顕示し、エネルギーを目に見えるものへと置換する手段として数学的な構造（繰り返し，幾何学的なパターン）を利用した。またミニマリズムは個々の芸術の純粋化を目指したものであるにもかかわらず、ディーン作品では舞踊と音楽の構成は常に密接に関連しており、一芸術としての独自性を保ってはいない。つまりディーンは舞踊を自律的に存在させることを目指しているとはいえない。この点から言えば、ディーン舞踊は、ミニマリズムの舞踊（ミニマル・ダンス）というよりも、ミニマリズムの傾向をもつ音楽と舞踊を融合させた芸術の形式をとっているといえる。

#### [注釈]

- \*1. Dean, Laura. 1977. "Step, Kick, Jump, Back-to-Basics Dance." The New York Times, Nov. 6, 1977. p. 6.
- \*2. 唐津絵理 1989. 「1960年代のアメリカ現代舞踊にみる他芸術との相互関連性」お茶の水女子大学卒業論文及び 1990. 第30回舞踊学会紀要参照。